狂言古本に見られる一段活用化の現象

蜂谷清人

一、はじめに
二、「虎明本」「天理本」における実態
三、「虎明本」における本文と注記の差異
四、「天正本」における全体的傾向と助動詞をめぐる問題
五、おわりに

一、はじめに

この論文では、近代語の大きな特色の一つといわれる二段活用の一段化の現象に関して、室町時代末および江戸時代初に書写された狂言古本の詞章にどのようにあらわれているかということを中心に述べようとする。それが、当時次第に増加しつつある一段化の現象の進展の理解に、一つの問題を示していると思うからである。

ここで調査の対象とする狂言古本とは、天正六年（一五七六）の奥書をもつ「天正狂言本」[注1]、寛永十九年（一六四二）大蔵虎明書写の「大蔵虎明本」[注2]、寛永年間頃和泉元宜の書写と推定される天理図書館蔵「狂言六義」の三つをさす。（以下、「天正本」「虎明本」「天理本」と略称）

これらの中、「虎明本」が由来のもっとも明らかなものであり、その意味においてもっとも中心的な位置を占める資料といえる。また「天理本」はいろいろの面から上述のように推定されるものであり、一段化の現象に関しても後述するように「虎明本」とほぼ同様の実態を示して居り、「虎明本」を補うものとして意味をもつものと思われる。

一方、「天正本」は以上の二本よりもかなり古い時期の奥書をもつが、本の性格は必ずしも明確でなく、先の二本が大蔵・和泉両流の家元系という由来をもつのに対し、そういう正統的なものかどうかも明らかでない。「天正本」は一般に「虎明本」「天理本」よりも一段古い狂言の状態を示すものと考えられている。[注3]確かにそういう面が多いけれども、一段化の現象について言えば、数の上からも種類の上からも後の時期の「虎明本」「天理本」よりも一歩進んだ状態を示して居り、その点考うべき問題を提起しているといえる。

また、「虎明本」などにおいて当時の話しことばをかなり良く取り入れているということは、一般的な意味で承認されるけれども、具体的にはその程度を明らかにしえない。

「虎明本」において、一段化の現象のあらわれ方が、本文の部分と注記の部分とで差異を示すが、これなどは狂言に用いることばと当時の話しことばとの関係を考えるに当って興味深い事実を示しているように思う。

ここで大蔵虎明の狂言観について詳述することは避けるが、能の狂言として卑俗にすぎるものを避け、雅正なるものを求めていることも知られ、こういう基本的な姿勢が当然これらのことば遣いにかかわりをもつことも考慮せねばならない。

ところで、室町時代末のロドリゲス著「日本大文典」に一段化の現象に関する興味深い記述が見られる。

それには、当時、二段活用が大体従来のまま（連体形が文の終止に用いられている点は異なるが）用いられていることを示しながら、更に附則として

現在形でE（エ）に終るあらゆる動詞は、話しことばで稀にしか使はれない別の構造に従ふ。ただ関東（Quantô）で用ゐられ、又、都（Miaco）で一部の者に用ゐられてゐる。それは語根にRu（る）の綴字を添へて作る。例へばCuberu（〈べる）、agueru（上げる）、motomeru（求める）、faneru（跳ねる）、todoqueru（届ける）、atayeru（与へる）、feru（経る）、ideru（出でる）、majeru（交ぜる）、mixeru（見せる）。（土井忠生氏訳本29ぺ。〈1〉はCuraberu《比べる》の誤りという。）

と記されている。つまり、一般には二段活用が保たれているが、東国の人々および都の一部の人々の間では一段化の傾向が強くあらわれているというのである。

これにもうかがわれるように、資料の性格によって一段化の現象の現れ方も当然相違することになるのであって、こういう面にも考慮を払う必要がある。

以下、前記狂言古本における一段化の現象について考察する。

二、「虎明本」「天理本」における実態

まず、由来の明瞭な「虎明本」の一段化の実態を見よう。

この本では、一般的に言えば

わたくしの腰をかくるでハ御ざなひ、よろひのこしをかけさせらるゝとおぼしめせ（よろい、一93ぺ）太郎冠者→果報者

のように二段活用の例が圧倒的に多く見られるが、その間

さきへゆけといへハほうりやうもなふうせる、あとにこひ（したうはうがく、二151ぺ）主→太郎冠者

おぬしがくうても、かほでしれる程に、くうてミせさしめ（あわせ柿、三111ぺ）男→柿売り

など一段化の例も散見する。

一段化ということは、従来の二段活用の終止・連体・已然形の活用語尾の第一音節が未然・連用・命令各形の活用語尾と同じ形になることを意味する。もっともこの変化には段階があり、それぞれの資料においてその一段化がどのように行なわれているかが問題となる。

「虎明本」において、終止・連体・已然の各活用形にそれぞれ一段化の傾向の見られるものを抜き出すと次のようになる。（括弧内は用例数）

植ゑる（2）受ける（2）失せる（1）教へる（2）代へる（1）
駈ける（1）かぞゑる（1）こしらへる（4）支へる（1）させる（1）知れる（1）たべる（1）でる（2）ととのへる（1）
とびこへる（1）とめる（1）とらゑる（1）とりかへる（1）
とりさへる（1）にげる（1）ぬぎかへる（2）寝る（13）ひかへる（1）ふすべる（1）見える（1）

以上、異なり語数25、延べ語数45がその数である。[注4] そして、「虎明本」におけるこれらの例は傍白・対話か注の部分に限られ、語り・歌謡などに見られないことも注意される。

次にこれらの数が二段活用のものに比較してどういう状況か知る必要がある。その比較にはいろいろの方法があるが、ここでは大体の見当をつける意味で、ア行のことばに限って、しかも対話とか歌

話とか場の区別をせずに比べてみる。

ア行において一段化したものは、先にあげたように、植ゑる(2)受ける(2)失せる(1)教へる(2)の異なり語数4、延べ語数7という数であったが、一方、二段活用の例は、

あがむる(2)あくる(4)あぐる(6)あぐれ(1)あたふる(1)あたゆれ(1)当つる(4)あづくる(5)《思ひ》あはする(1)《待ち》あはすれ(1)あらはるゝ(1)生くる(1)いづる(38)いばふれ(1)いひかくる(2)いひつくる(2)いましむる(1)いらゆる(3)入るる(12)受くる(4)失する(3)うちあくる(1)うまるる(5)うらむる(4)うるる(3)おほせらるる(149)おほせらる(2)おせらるる(1)おほせらるれ(13)仰付らるる(3)仰付らるれ(1)《とめ》おかる(1)おさむる(2)おさむれ(1)おしわくる(1)おしつくる(1)おしゆる(3)おしよする(2)落つる(10)落つれ(1)おづる(1)おひかくる(1)おっかくる(1)おぼゆれ(1)

で、異なり語数44、延べ語数302の数を得る。

ここでは、一段化したものと二段活用のものとの終止・連体・已然形における比は、異なり語数で1対11、延べ語数で1対43であり、一段化の度合は低いといえる。(「虎明本」全体としては、延べ語数で48対1200余、つまり、大体1対25)

「天理本」でも一段化の例は

主
＼お手ヲあげられひなどゝ云テしかる、子メル也(上三、二千石)

のほか、

あてる(1)うせる(1)むめる(1)きれる(1)でれ《バ》(1)ぬける(1)トメル(1)ねる(14)はへる(3)引むける(1)ふゑる(1)わせる(1)

の、異なり語数13、延べ語数28の例を得るにとどまり、二段活用との比率も「虎明本」よりむしろ低い。[注5]

後述するように、「天正本」では一段化の例と二段活用の例が延べ語数でほぼ1対2の割合で見えるのであって、これに比べると「虎明本」と「天理本」の一段化の例はきわめて少ないといって良い状況である。

もっとも、「虎明本」とほぼ同じ時期に書写され、しかも当時の話しことばを比較的多く取り入れていると考えられている「醒睡笑」や「説経節正本」では、一段化の用例がほとんど見当らないのであって、それに比べれば「虎明本」「天理本」では新しい語形としての一段化の例を多くとり入れているといえる。[注6]

ところで、先に「虎明本」「天理本」の一段化の用例としてあげた語は、同じ本の他の箇所ではむしろ二段活用として用いられているものであり、いずれにせよこれらは過渡的な動揺期の段階の実情を示すものといえる。

しかしながら、これらを子細に見て行くと、その形式においてそれなりの変化の傾向が見られるのであり、一段化の現象がどういう経過で進展していくかを考えるに一つの目安を与えてくれる。

「虎明本」における一段化の現象の外形上の特色として、次の四つの事柄があげられる。

(1)対話および注記の箇所において例外なく一段化しているのは、単音節の語幹を有する「ねる」であり、他は一・二段の両形に用いられている。

「虎明本」においては、小歌に2例

独りぬる夜ハさはらぬ物を…（はなご、二401ぺ）

のような二段活用の例を見るが、その他は

＼ミどもゝ是にねる程に、なに成共用な事があらハおしやれや　（じしゃく、三23ぺ）

＼あどハわき上面のかたへむかひてねる、して…わき上面のかたへかほをなしてねる、あどいねなをるやうにして…

のようにいずれも一段化した「ねる」が用いられている。（13例）

この傾向は「天理本」でも全く同様であり、一段化の明らかな29例のうち14例がこの「ねる」の例なのである。

単音節の語幹の語において一段化の現象が早く進展していることは、夙に先学の指摘されて居るところであるが、少くも江戸時代初の話しことばとしてはこの語はほぼ一段化を完了しているものと言えよう。

もっとも、この「ぬる」（ねる）の場合と同じ条件の「出る」では、仮名書きのもののみを例にとると、「でる」が2例対話のみ、「づる」が対話に3例、注記に1例、小歌に1例、また「いづる」が対話に4例、注記に27例とみられる。

「でる」は

何としうとのもんぐわいで、三つ拍子をうてバ、てうしがでる

を、たべると仰らるゝか（音曲聲、一566ぺ）

のように対話のみに見られて、その話しことばとしての性格が明らかであるが、「づる」「いづる」も普通に話しことばとして用いられて居り[注7]、「ぬる」よりは一段化の遅れていることが知られる。外形的には同じ条件であっても、それぞれの語における一段化の進展の状況は必ずしも一致しないのである。[注8]

(2)上二段活用の語の一段化した例は認められない。

「虎明本」の一段化の例は、いずれも下二段活用の語において見られるものである。上二段活用の語は「生くる」1例（対話）「うらむる」4例（対話）「落つる」9例（対話8、語り1）と見え、いずれも一段化していない。

江戸時代には一般に上二段活用の語の方が、下二段活用の語よりも一段化がはげしいと考えられているが[注9]、「虎明本」ではむしろ逆といえる。両者の間の差の生ずる形態上の理由は特に考えられず、上二段活用の語よりも下二段活用の語の方が種類が多く、したがって使用される機会も多いから、新しい変化が後者に自然強くあらわれるという結果になっているのかも知れない。因みに、序に記したロドリゲスの「日本大文典」の一段化の例が、いずれも下一段化の例であるのも、当時の一般の傾向を反映しているとも思われる。[注10]これらのことは、「天理本」でも全く同様である。

(3)已然形における一段化の用例は「虎明本」には見られず、「天理本」でも「出れ」の一例にとどまる。

今まで「虎明本」の一段化の例としてあげたものは、いずれも連体形（終止形）の例である。已然形に一段化の例を全く見ないということは、後の時期の増加と思い合わせる時、（意味は仮定条件を示すようになるが）一段化が活用形全体におよばない未発達の段階であることを示すものといえよう。

「天理本」でも、次の「づれ」と併用された「でれ」一例を見るにとどまる。

六がでればかち、よの目がヅレバまけと云テさいをミせておしゆる（上九十七、奕十王）

そして、この唯一の例が単音節の語幹をもつ語であることに興味が惹かれる。(1)に触れたように、このような語において一段化の進展が早く行なわれたということであろう。

(4)助動詞の一段化の例は全く見られない。

二段活用の助動詞として「る」「らる」「す」「さす」が用いられているが、活用の形では動詞と全く同じ条件にあるこれらの語において一段化の例が見られないということは、数多い動詞がそれぞれ個別的に独自の意味を示しているのに対し、これらの助動詞は、受身あるいは使役といったある重要なはたらきを明確に示すものとして意識的に用いられることの多いことが原因なのではないかと思う。いずれにせよ、動詞において一段化が早く行なわれ、次第に助動詞にも及ぶことを示しているように思う。

「虎明本」に、「さする」が動詞的に用いられた時に限って

〳〵汝もおこせひ〳〵……せまひと云　むりにさせる（ふたり大名、一452ぺ）

のように一段化した例の見られるのも注意すべき現象である。「天理本」でも助動詞の一段化の例は全く見られない。ただ「天正本」だけには「せる」「させる」の例が比較的多く見られ、考うべき問題を示しているが、このことは後に触れる。

なお、以上にあげた特徴のほか、「虎明本」の一段化の例の分布に偏りのあることも気付かれる。これは「虎明本」のことばの性格を考えるに重要な問題を提起するものであり、項を改めて述べる。

三、「虎明本」における本文と注記の差異

先に触れたように、「虎明本」について子細に見ていくと、一段化の用例が本文の部分よりもむしろ注記の部分に偏って用いられていることに気付かれる。すなわち、一段化の全用例48例のうち34例もの多くが注記としてト書き風に書き入れた部分に見え、その残りが本文の対話の部分という分布になっているのである。(語り・歌謡ではいずれも二段活用を保つ。)もっともこれらのうち、一般に一段化の傾向の強い「ねる」が12例も含まれているが、これを除いても全体の傾向に大きな変化はないといえる。

注記の部分の一段化の例とは次のようなものである。

〳〵何とぞしてとらよふとぞんずる、がつきめやるまひぞ〳〵（ふとら　ゑる）きとり、二484ぺ）

〳〵さすぞ〳〵（と云てさすとそのまゝねる、わき上　面うしろにしてさいぜんのとかへる）（じしゃく、三27ぺ）

〳〵こなたへござれ、さゝへもたせた程に〳〵（と云て、袖をひかへるとき）（わかな、二302ぺ）

〳〵なんとした事ぞ〳〵（あふぎとりたゝく、つゞけさまたゝひて、てをうけるをたゝく）（岡太夫、一593ぺ）

もっとも、注記の部分において二段活用の勢力も強いのであって、もっぱら二段活用を用いている箇所もあり、更に

〳〵…主の鼻をふすべる時、しういやがる…鼻をふすぶる時も…（きつねづか、二254～255ぺ）注記

〳〵…弓を口にくわへ、かたをぬがうとするをおしゆる、又右をぬがうとする、たび〳〵をしへるなり（八幡の前、一643ぺ）注記

のように、同じ場面の同じ表現において両形の併用されている例も認められるのである。

因みに、この一段化の用例がどのように分布しているか、また一段化の生じた語において、従来の二段活用の形のものがどの程度行なわれているかを知るために、図表に整理してみる。

一段化の用例				二段活用の用例			
語彙（語形）	本文 対話・傍白	本文 語り・歌謡	注記	語彙（語形）	本文 対話・傍白	本文 語り・歌謡	注記
植ゑる	1		1	植ゆる	3		1
受ける				受くる	3		
失せる	1			失する	3		
教へる			2	教ゆる			2
代へる			1	代ゆる	2		
駈ける			1	駈くる		1	
数ゑる	1			（数ゆる）			
拵へる	1		3	拵ゆる	4		
障へる			1	障ゆる			1
させる			1	さする	3		
（させれ）				さすれ			
知れる	1			知るる	1		
食べる	1			食ぶる	10		1
出る	2			づる	3		1
				いづる	11	1	26
整へる			1	整ゆる	1		
飛び越へる			1	（飛び越ゆる）			
留める	1			留むる	3		15
				留むれ			2
捕ゑる			1	（捕ゆる）			
取り代へる			1	取り代ゆる			1
取りさへる			1	取りさゆる			1
逃げる			1	逃ぐる	6	1	11

脱ぎ代へる				
寝る	1			
扣へる				
ふすべる				
見える				
小計	10			
合計	45			
	35	1	1	1
	12	2	（脱ぎ代ゆる）	
			ぬる	
			扣ゆる	
			ふすぶる	
			見ゆる	
	74	20		
157	8	2		2
	75	1	1	1

一段化の例が注記の部分に多くあらわれる意味について考えるに、恐らく狂言の本文では従来の伝統的なあり方に従ってより雅正なる二段活用を用いることが多く、一方注記においては、大蔵虎明自身も普通に用いるようになって来ている新しい話しことばとしての一段化の例が、自然と入り込んで来ているということなのではないかと思われる。勿論、注記の部分のことばが全て話しことば的な性格というつもりではない。むしろ「…なり」「…ぞ」などの文末表現からも察しられるように、本文よりも文語的な性格のことばも多く見られる。恐らく、抄物の記述の例にも想定されるように、文語的な表現の中に口語的な表現も多く入りこむということと解されるのである。

今まで、一段化の現象を強調する余り、二段活用の勢力を軽視してしまった観もあるが、先の図表にその一端がうかがわれるように（この背後には更に多くの二段活用の例があるわけである。）、二段活用のままのものが一段化の例を大きく包みこんでいるのである。

「虎明本」における両者の差異を考えるに当って、次の本文（対話）の例にも注意したい。

身共ハふるまひをこしらへゆる程に、汝ハ其間ときをせひ（さっくわ、二271ぺ）主→太郎冠者

この「こしらへゆる」の例は、話しことば的に一段活用で「こしらへ（る程）」と書きかけ、本文の対話のことばにふさわしい二段活用「こしらゆる」に筆が転じた（意識的か無意識的かは別にして）とも考えられるが、うがちすぎでもあろうか。

それはともかく、今迄述べて来た事から、「虎明本」の本文のことばと日常の話しことばとの間に幾分差のあることは認めて良いものと思う。狂言のことばの史的乃至文体的特色を考えるに当って、このことを注意しておきたい。

四、「天正本」における全体的傾向と助動詞をめぐる問題

「天正本」の一段化の用例を「虎明本」「天理本」のそれと比べて見る時、単音節の語幹をもつ「得る」「寝る」が歌謡の類を除いて例外なく一段化していること、一段化の変化が已然形におよんでいないこと[注11]、上二段活用の語の一段化の例が認められないことなど共通の段階を示すものも多いが、一方次にあげる相違点も認められる。そして、それらはいずれも「虎明本」「天理本」などに比べて一段化の一層の進展の段階を示すものである。

その第一は、「天正本」における一段化の度合がかなり高くなっていることである。

いま「天正本」における動詞・助動詞の一段化の例と二段活用のままのものについて連体（終止）形、已然形に限定して比較すると、延べ語数において58（已然形0）対126（已然形4）、つまり大体1対2の比を得る。更に二段活用のものから語り・歌謡の例を除くと（これらには一段化の例は見られない。）58対82、つまりほぼ7対10の割合となり、両者が大体同じ勢力で行なわれていることを知る。「虎明本」の全体の延べ語数の比はほぼ1対25であるから、「天正本」の1対2の数はそれにくらべて一段化の度合のきわめて高いことを示しているといえる。

「天正本」では、一曲全体が一段化の例で統一されたもの（「おばが酒」）や二段活用で統一されたもの（「末広がり」）も見られるが、特に曲趣や場において使い分けられているわけでなく、むしろめいを聞こたゑるめいつくしによく合又おちのめひつくしに合せんとゆふまつ名をつくるあわた口とふまのてうとつけるさてはら道をつれて行とて名をよふいらへるかたな小袖わきさしみないたすとりてにくる（あわた口、24下）

のように、二段活用の例と一段化の例とが同じ曲の同じ様な場において用いられているものも多いのである。語り・歌謡などもっぱら二段活用のものが用いられる特殊な場を除いては、二段活用と一段化の例がかなり恣意的に併用されていると言えるようである。

相違点の第二は、「虎明本」「天理本」では助動詞の一段化の例が全く認められなかったのに対し、「天正本」では使役の意を示す「せる」「させる」の例がかなり用いられていることである。

今その数を示すと、

大明にたちをもてとゆふもんたふ大明もつこふもたせる後うらせる（こふうり、18下）

など「射させる」「うらせる」「おかせる」「かたらせる」「つがせる」「のませる」「申させる」（以上各1）「もたせる」（2）の合計

9例である。

もっとも、もとの「する」の例は、「あぶらする」（1）「いはする」（3）「いただかする」（1）など延べ34例（うち、語り・歌謡の類10）の多きを数えるのであって[注13]、その点従来の形の方が勢力が強いといえる。（「さする」の形は見られなかった。）また

そう者出合両国の者一度参事目出きとて歌よまする…うたほめる

酒のませる（ゆつり葉、28下）

のように同じような場において両形の併用されているものも、変化の過渡的な現象として理解される。この「せる」「させる」は、語り・歌謡の類には一例もあらわれないのであって、やはり話しことば的な性格を示すものといえよう。

ところで一方、同じく助動詞でありながら、「天正本」において受身・尊敬の意を示す「るる」「らるる」の一段化の例が全く見られないのである。たとえば

おそきとてしからるゝ（もち酒、28上）

犬にくらわるゝにけるとめ（犬引さとう、29上）

など23例（うち、「らる」1、「らるる」3）いずれも二段活用の例である。[注14]

二段活用の語の一段化ということは、動詞ばかりでなく同様に活用する助動詞にもあらわれるはずのものである。

しかし、その現われ方には遅速があるようであり、「虎明本」「天理本」で助動詞の一段化の例の見られないのは、助動詞の一段化が動詞よりも一歩遅れているもので、室町時代末乃至江戸時代初の少くも上方語の一般的な状況を反映しているものと考えられる。その後、元禄年間頃になって助動詞の一段化の例が幾分多くなるのも、時間的な推移にもとづくものと解されるのである。

こう見てくると、室町時代末の「天正本」において助動詞の一段化した「せる」「させる」の例が多く認められるということはきわめて特殊な現象といえる。そしてまた一方、同じ助動詞でありながら、「るる」「らるる」に一段化の現象が全く認められないということにおいて、考うべき問題を二重に含んでいるといえよう。

「天正本」の性格について、表章氏は一つの疑問・仮説として地方（特に東北）の狂言師の記録した本という考えを述べて居られる。（「天正狂言本」（朝日古典全書本『狂言集』下巻所収）の解説）「天正本」を見るに、「大名」を「大明」、「檀那」を「段な」、「くんこう（動功）」を「くつかう」、「しつとり」を「しむとり」など表記に恣意的なものも多く、無教養な者の記述というようにも考えられるし、また

おのれは何としてすれぬといふあとたからすれぬとゆふせうはら立る（と草、26上）

のように、断定の助動詞「だ」、理由の接続助詞「から」という東国語的特徴の明瞭なことばの使用も認められるのである。（「だ」は一例。「じゃ」は認められない。）

もっとも「天正本」において、東国語的特徴といわれるものと異なる例の多いことも否めないが[注15]、いずれにせよ記述の仕方などから、上方の教養ある人の手に成るということは考えられず、ロドリゲスのいう「関東または都の一部の者」のそのどちらであるかは断言できないにせよ、とにかく「虎明本」「天理本」などと異なる位相のことばを伝えている面が強く見られるといって良いものと思う。そう考えることによって、時期的に早い「天正本」に後の「虎

明本」「天理本」よりも一段化が進展しているという事実がはじめて納得されるともいえる。

「天正本」において助動詞「るる」「らるる」が例外なく二段活用を保っているのに対し、同じ助動詞の「する」「さする」が一段化した形でも多く用いられているという問題はどう考うべきであろうか。一段化の進展において、一般的にこのような傾向があったと見るべきものであろうか。

一般的に言って江戸時代初期までは助動詞の一段化の例がきわめて稀な時期であり、したがってまた、「天正本」に見られるような顕著な傾向をその中に見出すことはむずかしい。

ロドリゲスの記事にしたがい、また「天正本」のことばを東国的なものとの一応の想定にしたがって、当時の東国語資料といわれるものを調べてみてもその間の事情は明らかでない。

たとえば、「天正本」とほぼ等しい天正七年頃成立の「人天眼目抄」(足利学校蔵)には助動詞の一段化の例は見当らず、また室町時代末から江戸時代初にかけての「巨海代抄」「大淵代抄」(駒沢大学蔵)でも同様である。

一方、江戸時代初の「三河物語」[注16]では、動詞のほか助動詞にも一段化の例があり、やはり「虎明本」「天理本」などよりも一段化の進展していることを知らせてくれるのであるが、助動詞の一段化に関していえば、

手をヲオセル物ならバ…(上五十四ウ)
十万余ふちせられると、家康聞召而…(下七十一ウ)
女房云ハ、若も御台どいわれゝバしうげんだが…(下十九ウ)

と、「せる」と並んで「られる」「れれ」の例も見え、両者の間に顕著な相違はない。

また、若干降って「雑兵物語」(明暦から天和年間の間)では、「せる」「させる」は一例も認められないのであって(「るる」の一段化の例は一例ある。)[注17]やはりその差ははっきりしない。したがって文献にあらわれた限りでは、「天正本」の用例は東国語としてもかなり特殊であるといえる。

上方語の資料において、江戸時代初期の「おきく物語」[注18](元和元年―一六一五成立)のように、「るる」「らるる」がいずれも下二段活用であるに対し、「する」では一段化した例が

そのところへ、つれゆき候はゞ、また〳〵金(かね)とらせる間(あいだ)、つれ行(ゆき)くれよとたのむ(三オ)

のように見られる例もあるが、この例はここの一例だけであり、はっきりした傾向とはいえないように思う。

上方語の場合、助動詞の一段化が幾分増加する元禄年間頃の資料[注19]においても両者の差はほとんど認められない。

両者に顕著な使い分けのある「天正本」と使い分けのないその後の資料との関係から強いて考うるに、「天正本」に見られる事実は、ある位相において、サ行四段活用已然形+「る」(「り」の連体形)によって生じる「せる」の形への類推や、動詞的に用いられる「さする」の一段化の影響などで、助動詞「する」「さする」が「るる」「らるる」よりも早く一段化したことを反映し、ひきつづき「るる」「らるる」が一段化した結果、その後一般にはいずれにせよ両者が大体同じような割合で用いられたという推定もなされなくはない。しかし、「天正本」と同じ時期において同様の現象を示す資料の見当らない現在、この現象が果して一般的な進展の一つの段階の状況を

示すものか、あるいは位相的にきわめて特殊な事実を示すものか、更にはまた、現存のテキストの書写の際に天正年間の原本に恣意的な変更が加えられたものか（法政大学能楽研究所所蔵本は書誌学的に江戸時代に入ってからの筆写本との推定もあると聞く。）などいろ〳〵の疑問もあり、ここでは一応「天正狂言本」の事実を提示し、更に今後の調査に俟ちたいと思う。

五、おわりに

以上、狂言古本における一段化の実態を整理し、その特徴について考えた。紙幅の関係もあり、一段化の実例の一々の吟味の過程を述べることはできなかったが、これらの資料における大体の傾向は知られると思う。

その事実は本文中の記載に委ねるとして、更に①「虎明本」の本文と注記の間に見られる相違、②「天正本」に見られる一段化のいちじるしい進展の状況、③「天正本」の助動詞間に見られる明瞭な相違などに、これらの資料のそれぞれの事実がどのように関係し合うのか、言いかえれば、これらがどういう時期のどういう位相の事実を反映しているのかという解釈の問題もあった。

この小論では、①については、「虎明本」の本文のことばが、その伝承の仕方との関連などから、「虎明本」の書写当時の話しことばよりも幾分従来どおりの二段活用を保存する度合が強いため、②については、「天正本」が正統の流儀からはずれた狂言のことばを伝え、話しことば的要素が一層強く出ているためではないかと考えた。③については、その時期のものとしてきわめて特殊に思われ、当時のある位相の一般的な事実を反映しているものか、あるいはきわめて恣意的な現象かなどの疑問もあり、はっきりした結論を出すにいたらなかった。

とにかく、同時期の、同形式のものとはいっても、資料の性格にしたがってこのように多様な形であらわれているのであるが、これはとりもなおさずことばの変遷の事実および認識の複雑さを示しているともいえよう。

いずれにせよ、これらの問題の解明は、更に各位相にわたる変遷の考察にまたねばならないことであり、問題として提示するとともに御教示を待つ次第である。

注1　古川久氏編「狂言古本二種」（わんや書店）による。全体が筋書き風の記述。

注2　笹野堅氏編「古本能狂言集」（岩波書店）所収の脇狂言之類から集狂言之類までの二百三十一曲を対象とする。

注3　諸本の性格については小山弘志氏の「狂言集」（岩波古典大系）の解説や池田広司氏の「古狂言台本の発達に関する書誌的研究」（風間書房）などに詳しい。

注4　以上の例の漢字は意味にしたがって適宜当て、仮名遣は原本の表記の一例にしたがった。なお、「出る」「付る」など読みの不明なものは数から除いた。また「ふせる」（二742ぺ）「のみふせる」（一141ぺ）の例も、四段活用の已然形＋完了の助動詞「る」と考えて除いた。

注5　「虎明本」では概算1対25であるが、「天理本」では二段活用専用の「抜書」を除く「六義上下」だけでも1対36（27対784）の数を得ている。

注6　たとえば天下一説経与七郎正本「さんせう大夫」では「用ゐる」の例を見るが、これは本来一段活用としても用いられていたものである。その他はいずれも二段活用を保ち一段化していない。もっとも室町時代末の資料でも「運歩色葉集」などの辞書には一段化の例もかなり多く認められ（静嘉堂文庫本ではほぼ1対6）資料の性格によって相違がある。

注7　たとえば「づる」は、小歌のほか「つえとりばひがづるよ」（一592ぺ）などのように対話や注記にも見られる。

注8　当時一般に「経（へ）る」と一段化している例が、「虎明本」で「我まんぎゃうのこうをふるといへども…」（二78ぺ）のように二段活用として見える。これは、恐らく山伏の呪文として改まった表現のためであろう。

注9　奥村三雄氏「所謂二段活用の一段化について」（近代語学会編「近代語研究第二集」所収）など参照。

注10　「天理本」では上二段活用の例として「うらむる」「おつる」「おづる」がある。「天正本」でもこの事に関しては「虎明本」と同様である。ただ上一段活用の語として「借りる」が5例見えるが、これは本来四段活用の語である。この形は一般に東国語の特色とされるものであるが、「運歩色葉集」にも見え、その性格は必ずしも明かでない。なお、「運歩色葉集」には上二段活用の一段化の例として「媚（コビル）」「渋（サビル）」などが見える。

注11　もっとも、二段活用の已然形の例も、節がかりの部分の「となふれ（バ）」（3例）、小歌の「はるれ（バ）」（1例）を見るだけである。

注12　注10参照。

注13　「おどろかす」（2例、語り）は四段活用の動詞と考え、数に含めない。

注14　「三人の者まつろ(百)日犬をいてたんれんせられゝ」（つりぎつね、28下）の例は一段化の例と考えられなくもないが、語りであること、已然形の来べき文法上の理由のないことから「せらるゝ」の誤記と考える。

注15　ハ行四段動詞連用形のウ音便形の圧倒的な使用など。

注16　元和八年成。文科大学史誌叢書所収の本による。

注17　岩波文庫本による。「ひんぬすまれるな」。注記によれば、ほかに「ひっぱさまれれども」の上に「るれ」と訂正した箇所があるという。これを加えれば2例となる。

注18　天保八年刊本による。

注19　注9参照。

—共立女子大学助教授—